

メディアスクーリング

社会学

担当

徐 玄九
(ソ ヒヨンク)

1

Introduction

社会学的想像力

要点

- ①言葉の意味を語源から学びなおす
- ②社会学的ものの見方、考え方の特徴
- ③社会学的想像力の重要性

Liberal arts(リベラルアーツ)とは？

- ①起源は古代ギリシャの自由市民階級(リベラル)に必要な知識機能(アーツ)のことを指す。
- ②すなわち、西洋の思想伝統のなかで、自らものを考え行動する、自由な市民を育てる課程と考えられていた。

社会や時代の問題に気づき、
その意味を理解し、
その解決に向けて考える力

③古代ローマ時代には「自由7科」(文法学、修辞学、論理学、算術、幾何学、天文学、音楽)となり、以後の大学教育へ受け継がれていったもの。

④日本は明治期西欧的大学制度を導入し、西欧的知識の普及に力を入れた。その後、第2次世界大戦後は旧制高校(3年)と旧制大学(3年が標準)が4年制の新制大学へと統合。**前期課程2年は、アメリカ大学におけるリベラルアーツ教育をモデルに教養科目の履修に充てられた。**

「university」・「college」の語源

university

- ・ラテン語の「*unum*(1の意味)」+「*vertere*(～に変わる)」に由来
- ・*universitas*(ユニベルシタス=個人の集団が一人の人間のように行動すること=「universe(宇宙)」と同様)学生のギルド(組合)から始まる。後に教師のギルドも作られ、その連合体を意味するようになる。
- ・「教師と学生の集団」(*universitas magistorum et scholarium*)から、大学を表す「university」となった。

college

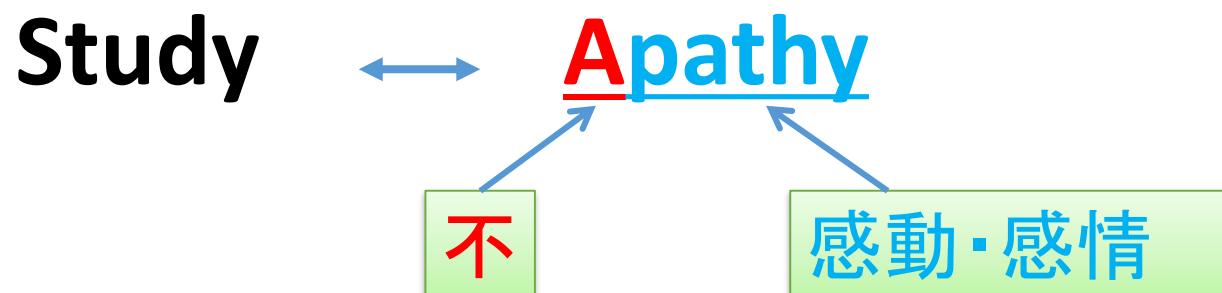
ラテン語 = *colegium*
Con(共に)+ *ligare* (結びつける)

Studyの語源

Studium(ギリシャ語:情熱・熱意)が語源

Studiumの動詞形Studeo=「～している状態」 **Study**

名詞形Studens=「情熱を傾けている人」 **Student**



Education=教育

ラテン語のeduco – educare – education(教育)
– educate(教育する)
– educe(析出する)

e- は本来
ex- で、
「外に(out)」

①引き出す
②連れ出す
③外へ伸ばす
-duc-: 導く(= lead)

「卵を返してヒヨコにする」という意味から、
①引き出す
②内部から発展する
③使うことで育てる

55年館511教室入り口



「学而不思則罔、思而不學則殆」(『論語』)

学びて思わざれば則ち罔し、

新しい知識を入れる
気づく

思いて学ばざれば則ち殆し。

モノを自分の頭で考える

「内容なき思惟は空虚であり、
概念なき直観は盲目である」

(カント『純粹理性批判』)

understand

Under + Stand



To stand between

原意

「AとBの間に立つ」

Interest

inter + est(esse)



「～の間」

「存在する」

原意

「間に存在する、関係する」

社会

[英]society [仏]société [独]Gesellschaft

Societyの語源 = **socius** ⇒ **societas**
(ソキエタス : ラテン語)

- ①複数の個体とその個体間の相互作用からなる集合体で、人間以外にも通用可能な概念。
- ②比較的大人数の人々がそのなかで生活を営んでいる制度や関係の総体とその状態を指す用語

社会

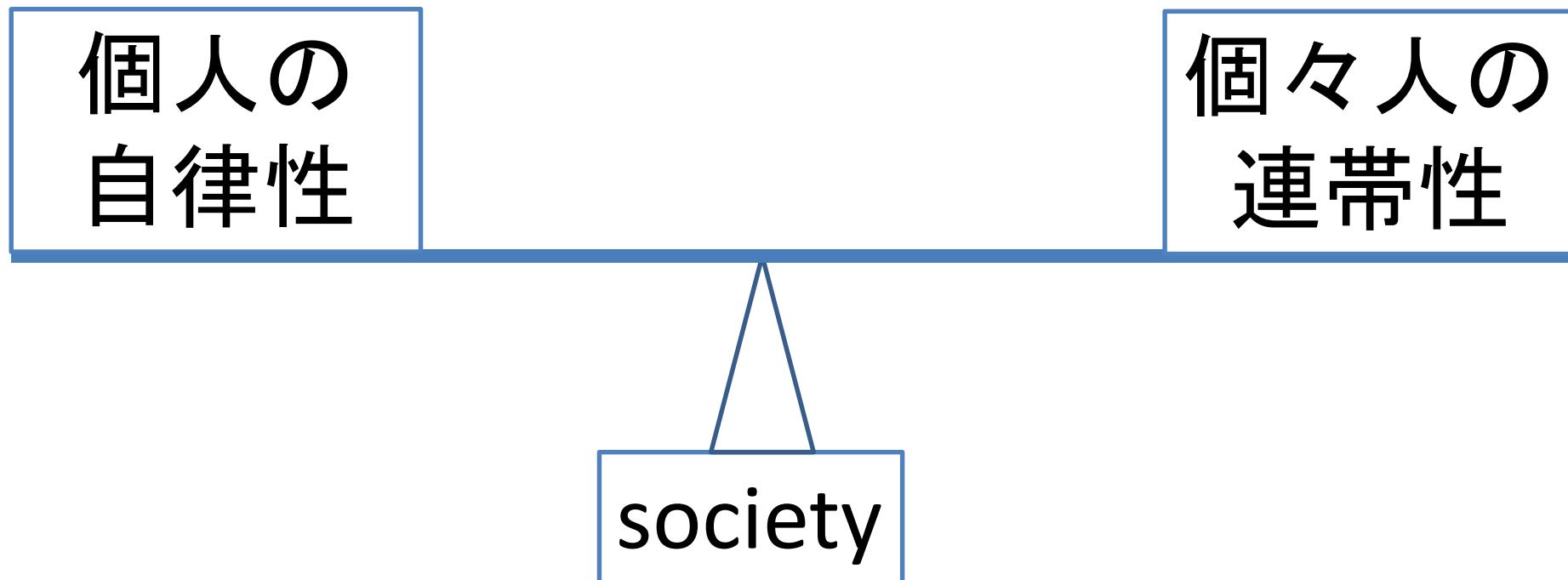
[英]society [仏]société [独]Gesellschaft

③英語の「**society**」の訳語として「**社会**」が用いられるようになるのは**1870年代**以降である。

④「**社会**」を意味する「**Society**」には自律的個々人が相互に契約を結ぶという意味が含まれている。すなわち、「**社会**」とは、個人を尊重する自律性と契約に基づく連帯性の意味が共存しているといえる。

⑤「**社会**」の両軸をなす「**自律性**」と「**連帯性**」がいかにバランスを取るかが問題である。

社会学を一個の知の領域として成立させている主題
=「社会秩序はいかにして可能か」という問い合わせ



社会は、宗教または道徳倫理によって、または罰則や賞賛などのサanksion (sanction; 制裁、裁可、承認)によって個人を社会秩序に向かわせるが、これが社会統制のメカニズム (mechanism) である。

道德的圧力 (Moral Pressure)

道德的規範による協力/裏切り行為の抑制

ヨーロッパ = 超越的な唯一神

インド = 輪廻思想

中華文明 = 歴史

東西古今を問わず求められた人間関係の基本

- ・「己所不欲、勿施於人（己の欲せざる所は人に為す勿れ）」（『論語』）
- ・「あなたにとって好ましくないことをあなたの隣人に対してするな。これが律法の全体であり、他の全てはその注釈である」（『タルムード』）
- ・「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」（『新約聖書』「マタイの福音書」）
- ・「これが義務のすべてだ。人が他人からしてもらいたくないと思ういかなることも、他人にしてはいけない」（『ヒンドゥー教のマハーバラータ』）

自らの常識を疑う=「自明のことを問う」

自明性から距離をとる

「いやしくも社会についての一科学が存在するとすれば、それは、種々の伝統的偏見のたんなる敷衍にとどまるべきではなく、一般の眼に映じるのとは異なった仕方でものを見るようにさせることを予期しなければならない。」

デュルケム『社会学的方法の規準』(宮島喬訳、岩波文庫、1895=1978)15頁。

ブレヒトの異化効果

従来の「感情同化の原理」に基づく演劇とは違う「**異化の原理**」に基づく新しい演劇のあり方

【注】ブレヒトのいう異化(Verfremdung)とは「まずその出来事ないしは性格から当然なもの、既知のもの、明白なものを取り去って、それに対する驚きや好奇心をつくりだすこと」である。その目的は「観客が社会的立場にたって有効な批判を行えるようにすること」であり、「自己をふくむ自然と社会を批判的に対象化する方法」なのである。

千田是也訳編『今日の世界は演劇によって再現できるか—ブレヒト演劇論集』(白水社、1962)123頁。

佐藤毅『現代コミュニケーション論』(青木書店、1976)171頁。

自らの常識を疑う=「自明のことを問う」

自明な世界(world-taken-for-granted)

日常生活において、われわれは素朴な態度で(あるいは自然的態度で)世界に向かい、その存在、あり様については何の疑念も持たない。このような世界の様態が「自明性」である。ただし、このような「自明性」も絶対的なものではなく、「さらに注意が向かれるまで(until further notice)」持続するにすぎない

(P.L.バーガー『社会学への招待』(水野節夫・村山研一訳、思索社、1963=1979)40頁。

自らの常識を疑う=「自明のことを問う」

自明な世界(world-taken-for-granted)

わたしたちは、このような自明性をもった知識、「常識的知識」(common-sense-knowledge)にしたがって、なかば無意識のうちに—「自然的態度」でルーティーン化した—日常生活=「自明な世界」を生きている。

「常識的知識」≒「日常知」≒「日常的思考」(thinking as usual) ≒「通念」(lay-belief)。用語はいずれもアルフレッド・シュツツのもの

社会＝われわれを取り巻く他者との経験

多種多様な社会の経験を理解するための**二つの始発点**

- ①他者との出会いのあるものは「大きな驚き(Sense of wonder)」であるが、あるものは「日常の出来事(routinize ; routinization)」になっている側面
- ②他者とは「対面した状況で個人として」出会うが、ある他者とは「離れた場所の匿名の集団の代理人として」接触するという側面

社会＝われわれを取り巻く他者との経験

われわれの他者との経験の大部分は日常的慣例(routine)から成り立っている。この経験を一定の時間持続する一つの枠組みとして認識しうるようになるからである。これを社会学の用語でいうならば「構造」から成り立っているといえる。「構造」とは、人々が日常的状況のなかで繰り返す行動パターンのネットワークを指すと解することもできる。

用語

「平凡なこと」および物事が平凡「になる」過程を意味する「日常的慣例(routine)」および「日常化(routinization)」という用語は、ドイツ人社会学者M.Weberに由来する。

2つの注意点

①個人的な危険性＝常識を見慣れないものに代える。

新しい情報(知識)を提供するのではなく、新しい観点を導き出すに重点を置く。



常識の揺らぎと自己認識の不安を覚えるかもしれない。

②政治社会的な危険性＝慣習的なものや既存の観念、信念から私たちを離脱させるかもしれない。



「よい市民」になる前に、「悪い市民」になるかもしれない。

危険にぶつかった場合の反応

=回避

=懐疑主義に陥る可能性有り。

- ・長い歴史のなかで繰り返し提起されてきたにもかかわらず、それがなくなることはなかったという問題は、仮に解決は不可能かもしれないが、この問題が避けることもできないということを示しているのではないか。

この問題を回避できない理由、その問題から逃げることができない理由は、私たちの日常がこの問題に対する答えになるかもしれない。

- ・衝撃を受けるような発見を避けたいと思っている人々、社会とは日曜学校で教えられる通りのものであると信じたがっている人々、「自明な世界(world-taken-for-granted)」とアルフレッド・シュツ(Alfred Schuetz)の名づけた規則・格率(=世間で広く認められている行為の基準)が無事であることを望む人々、このような人々は社会学からは離れるべきであろう。閉ざされた扉の前で何の誘惑も感じない人々、人間に對して何的好奇心も抱かない人々、ただひたすら景色の美しいことに満足しているだけで、河の向こう岸の家々に住んでいる人たちに何の疑問も驚きも感じない人々、これらの人々もやはり社会学からは離れるべきなのである(Peter L. Berger *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*, P.L.バーガー『社会学への招待』(水野節夫・村山研一訳、思索社、1963=1979)38頁)。

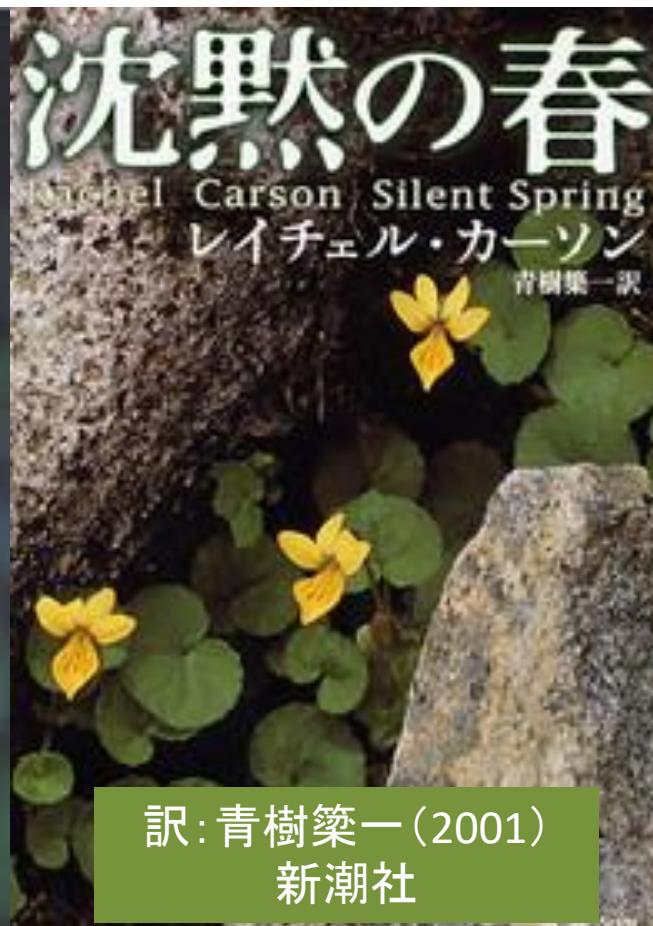
モルディブ



- ・全世界新婚旅行地1位
- ・人口の93%が観光業に従事する観光大国
- ・一つの島、一つのリゾート、夢の楽園モルディブ(約100の島々)
- ・100年に近いイギリスの植民地を経て、1965年に独立した後、2007年までに1人の大統領による独裁統治が続いた。
- ・その間、政府とリゾート開発会社が繰り返した主張=「リゾートが増えればあなたがたの働き場所が創られ、観光客がくれば収入が増大する」と。
- ・一つのリゾートが作られる度に、モルディブの人々に与えられた仕事は、リゾート建設の日雇い労働者、リゾートが完成した後は、客室清掃、食堂、ホテルなどでの単純雑務ばかりであった。技術も教育も必要なく、いつでも解雇できる非正規職労働者がほとんどを占めた。

- ・彼らはこのように地上の楽園として自分たちの島を手放し、自分たちが生まれ育った島と海で劣悪な環境に耐えながら楽園を夢見る**観光客の世話を**している。
- ・現在、モルディブ人口の93%が観光業に従事しているが、UN人権報告書によれば、42%の人々が一日1ドル以下で生活している。その上、**児童の30%が栄養失調**により苦しんでいる。
- ・その上、従来漁業を生業してきた彼らはもう魚に出ることも、海で泳ぐことも禁止されている。
なぜなら、観光客が抱く楽園イメージを損なうというのがその理由である。

レイチェル・ルイーズ・カーソン
(Rachel Louise Carson)
1907～1964年
作家・海洋生物学者



「レイチェル・カーソン日本協会」www.j-rcc.org より転掲

レイチェル・ルイーズ・カーソン
「Sense of wonder」

「Sense of wonder」

これこそ、社会への問題意識を呼び覚ますもの。

「知性(intelligence)」の源泉としての「感性(sensitivity)」の重要性

- ・「子供にとって「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないのです。「センス・オブ・ワンダー」神秘さや不思議さに目をみはる感性、この感性はやがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅…私達が自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する自然界から贈られた解毒剤なのでしょう。
- ・美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものに触れたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまなかたちの感情がひとたび覚まされると、次の対象となるものについてもっと知りたいと思うようになります。

The Sociological Imagination

C.W.ミルズ『社会学的想像力』の一部講読

C.W.ミルス『社会学的想像力』

(鈴木広訳、紀伊国屋、1965年)

第一章

今日、人びとはしばしば自分たちの私的な生活には、一連の罠が仕掛けられていると感じている。かれらは日常生活の範囲内では、自分たちの困難な問題を克服することができないと感じている。こう感じるとしても、それは多くの場合、全く当然である。というのは、普通の人間が自分で直接に知っていること、あるいは自分でやってみようとすることは、それぞれの個人的な生活環境によつて制約されているし、かれらの意思や勢力の及ぶ範囲は、職場や家庭や近隣のような身近なところに、いわばクローズ・アップ・シーンだけに限っていて、そのほかのシーンでは、かれらは代役として動きまわり、観客の立場にどぎまつていてからである。・・・・・人が罠にかけられているという感じをもつのは、自分の意志でしているつもりの生活が、実は個人の力ではいかんともしがたい全体社会の構造そのものに生じる、さまざまの変化によつて支配されているからである。

一つの社会が産業化されるとき、農民は労働者となり、封建領主は破産したり企業家になつたりする。……戦争がおこると、保険のセールスマンはロッケト発射兵となり、商店の事務員はレーダー兵になり、妻はひとり暮らしをはじめ、子供は父親なしで育つていく。

一人の人間の生活と、一つの社会の歴史とは、両者とともに理解することなしには、そのどちらの一つをも理解することができない。

・・・彼らは、人間と社会との、個人生活史と歴史との、自己と世界との相互浸透を把握するのに欠くことのできない精神の資質を持ち合わせていない。

社会的想像力を所有している者は巨大な歴史的状況が、多様な諸個人の内面的生活や外面的生活にとつて、どんな意味をもつていてるかを理解することができる。

社会学的想像力は、歴史と生活史とを、また社会のなかでの両者の関係をも、把握することを可能にする。それが社会学的想像力の役割であり、またそれだけの成果をそれは約束する（3-7頁）。

社会学的感受性

社会学とは「社会が私たちをそうさせる事柄と、私たちが自分自身をそうさせる事柄との結びつきについて究明する」学問であり、「社会学は、一人ひとりの経験の実在性を、否定するものでも軽んずるものでもない。むしろどちらかといえば、われわれ自身があらゆる面で組み込まれているより広い社会活動領域にたいする**感受性を養うこと**で、われわれは、自分自身の個々の特質や、さらに他の人びとの個々の特質を**より豊かに認識できるようになる**のである。」

(アンソニー・ギデンズ『社会学(改訂新版)』松尾精文ほか訳(而立書房1993年)10、23頁。)

社会学的感受性

以上のように、社会学は他者の存在や社会全体の構造が個人に与える影響や、逆に個人が周囲に及ぼす影響との作用といった相互関係を広く考え、かつ捉えていく学問であると言える。

社会学の魅力

社会学の魅力

「それ(社会学ー引用者)はまったく見知らぬものに出会う時の興奮ではなく、見慣れたものの意味が変容するのを知る時の興奮である。社会学の魅力は、今までの人生を通じて生き続けてきた世界を、社会学の視界(perspective)によって新しい光の下で見直す事を可能にしてくれることにある。

(P.L.バーガー『社会学への招待』(水野節夫・村山研一訳、思索社、1963=1979)34~35頁。

「社会学の、人間の生活や共同生活に対して提供する用意がある大きな仕事といえば、相互の理解や寛容さを、共通の自由の永続的な条件として促進することである」

(ジクムント・バウマン『社会学の考え方』奥井智之訳、HB出版局、1990=1993)307頁。